

「お許しただければ」

2020年03月26日

岩波の月刊誌『世界』に、英文学者の行方昭夫氏が「お許しただければ」というタイトルで、寄稿している。4月号は、「自分自身で考える」と題して、1946年に没したイギリスの随筆家 A・G・ガードナーのエッセーを翻訳、紹介している。吹き出しそうな話だが、いつの時代にも当てはまる問題を、深刻に言い当てている。

二人の女性が絵画展で、ある風景画の前でうっとりし、褒め過ぎではないかと思えるほどの賛辞を述べ合っていた。一人がカタログに目をやって「あらまあ、これは、B・W・リダーの絵じゃあないわよ」と大声をあげた。二人は賛美していた絵から離れて、目指す絵を見つけ、その絵の前で、また絶賛の言葉を語り合った。彼女たちは、世間から称賛するように教え込まれた評判をそのまま受け入れ、絵が違っていても気付かず、その通りに称賛し、悦に入っていた訳である。自分で考えず、自分で確かめられない事例だが、「私は受け売りしない」と言い切れる人はいないだろう。

二人のイタリア人が、タッソとアリオストのいずれの詩人が優れているかについて、長く激しい議論を交わした。どちらの主張が正しいか、決闘するに至り、二人は瀕死の状態、共に地面に倒れ込んだ。その時、一人の人が「実は、おれ、どっちの詩も読んだことがないのだ」と告白した。それを聞いた相手も「おれもそうだ」と応じた。そして、二人は息絶えた。これは、実話ではないだろうが、他人から受け継いだ思想に飲み込まれ、自分の考えを持ったことのない人たちについてのジョークである。

パリの陸軍士官学校の入試で、ある無署名の文章が出題された。それが、新聞紙上で、粗悪なフランス語の実例として取り上げられ、「一体全体どこでこのような粗悪で愚かしい文の寄せ集めを出題者は見つけたのであろうか？」と疑問が投げられた。文壇仲間での席でも話題になり、居合わせた全員が、文章を非難し、嘲笑した。一番大声で嘲笑したのは、19世紀、フランスの歴史家で、名文家であった J・ミシュレの熱狂的な賛美者だった人であった。ところが、後で、問題の文章は、最も脂の乗り切った時期のミシュレが書いたものだと分かった。吹き出してしまう話であるが、自分を顧みる時、笑えない思いになる。周りを覆っている常識的な声に合わせていれば、楽に身を処していける。

権力が絡むと深刻になる。安倍晋三首相は、森友問題に、自分や妻が関わっていれば、総理はもとより議員も辞めると豪語した。この言葉を受けて、公文書が改竄された。改竄を命じられた人は良心を咎め、自死された。命じた人には出世の道が用意された。自分の疑問を問い、自分の主張を貫いた人は発言の場を失う。言葉が抹殺される暗黒の世相である。古い時代では、自分の頭で考えたことを、大胆に発表したため、火あぶり刑に処せられた事件がしばしばあった。ガードナーは、「どうやら、残念ながら、真実はこういうことのようなのだ。つまり、正しい思考力は自由な環境では栄えず、圧政の下でのみ栄えるのだ。人は自由をはぎ取られて、初めて自由が死ぬほど大切だと覚えるのだ」と言う。

行方氏は、ガードナーの「正しい思考力は自由な環境では栄えず、圧政の下でのみ栄えるのだ」という逆説的な皮肉から、下記のように受け止めるべきではないかと書いている。暴君のいない国では、「自分で考える」のは容易ではない。しかし、周囲に合わせて、指導者の言いなりになっていると、今、享受している自由をも奪われてしまう、いくら注意しても、し過ぎることはない、と。いつの世も、自分の言葉、自分の行動をもつことは容易ではないが、諦めてならないということではないか。